

「子連れ合宿」ってどんなの？

「自分の子には注意をしない」！？

8/26～27、「新・スペースわん通信」準備号4にチラシをはさんだ「子連れ合宿in六甲山2006～子育ては子育ち・親育ち子どものいる日常から見つかるもの～」がありました。

ラーンネット・グローバルスクールの六甲山のびのびロッジで行われた子連れ合宿は、今年が2回目で、去年も今年も私はスタッフとして参加しました。

昨年は、大人の参加者9人にスタッフ5人、子ども14人（7ヶ月の赤ちゃんから小6まで）の参加、今年は大人の参加者9人にスタッフ4人、子ども12人（1才半から小4まで）の参加でした。

大人たちが講座で学んでいる間、そのすぐ隣で子どもたちが積み木やレゴなどで遊んでいます。基本的なルールは、「自分の子には注意しない」です。「えっ？」と思われるかもしれません、これは、子連れでイベントに参加する際、親御さんの気持ちを楽にする方法だと思います。

子連れで参加すると、自分の子が「何かしでかさないか」「しつけがなっていないと思われないか」という意識が働いて、ついついいつも以上に子どもを叱りがちになりはしないでしょうか？ たしかに、こういうルールを全員が共有していない場では、子どもが騒いだりすると「うるさい！」と子連れの母親を非難の目で見る人もいます。ですから、親はどうしても、「こういう場では静かにしなさい」「～してはいけません！」と、「コト」が起きる前に過剰に周囲に気を遣うことになります。

そういう気遣いから解放するためのルールなのですが、たしかに、大人が学んでいるのに子どもが騒いだりケンカなど「コト」を起こしたりすると困ります。ではどうしたらいいのでしょうか？

よその子に注意する練習を

この「子連れ合宿」では、「自分の子には注意しない」というルールと一緒に、「よその子に声をかける練習・注意する練習をしましょう」「『うるさい！』と思ったら、そう思った人が注意しましょう」と伝えています。つまり、その場にいる大人全員で、子どもたちを見るのです。

核家族となり、ご近所づきあいなども昔と状況が変わってきて、大人がよその子を注意することも少なくなり、子どもも親や教師以外の大人に注意されることに慣れていないようで、事件が起るとそのことが指摘されることがあります。

でも、いきなり昔と同じようにできるわけではありません。納得の上で共有しているルールがないと、「よその子どもに注意する」というのはトラブルの元になります。

なら、こういう「子連れ合宿」や、子連れの講座などで、ルールとして共有して練習し、それを少しづつ自分の周りに広げていけばどうでしょう。そして、わが子に対しても、「コト」が起きる前に口うるさく注意するというのを、少し様子を見てみると、いつもと違う展開になることがあります。

子どもが起こす問題は、

最高の学びの場をつくる

昨年の合宿での出来事です。

1日目、大人たちが子育てで困っていることや大事にしていることなどを話している横で、10人ほどの子どもたちが、積み木やブロックで遊んでいました。

途中、5才のA君とT君の間で「コト」が起きました。

A君は、お父さんのお仕事の関係で転勤

が多く、集団になじむのが苦手のようでした。他の子どもたちがパワフルに遊んでいるのに、なかなかその中に入っていないません。

そのA君が手に持っていたブロックが、たまたま近づいてきたT君の顔に当たってしまったのです。T君は、かっとなって、手に持っていたブロックでA君をたたき、二人とも大泣き。A君にすれば、自分も何が起きたのかわからないままT君にたたかれ、T君にすれば、A君にたたかれたからその仕返しをしたというわけで、それぞれの言い分はあるでしょうが、何せ5才、それもこの日が初対面です。

他の子どもとのつきあいに不慣れなわが子のところにすぐ飛んでいこうとするA君の親御さんと、「きっと、うちの子が何かしてかしたんです」と謝ろうとするT君の親御さん。そこで、大人の判断で解決してしまうことにスタッフがストップをかけ、子どもたちの言い分を聞いてみることにしました。

すると、この様子をそばで見ていた他の子どもが事情説明の補足をしてくれたりして、最初にT君の顔にブロックが当たったのは不可抗力だったと判明。「今の出来事は、たまたま起きたことだったんだ」とわかつて、5才の男の子たちは、「痛いからもうせんといでな」「うん、わかった」というやりとりをして仲直り。

この状況を複数の大人が見守り、手を出し過ぎないようにブレーキをかけることで、子どもたち二人が何か一つ乗り越えた感じでした。もちろん、大人も。

A君のお父さんは、こうなった前提に「自分の子どものことだけでなく、他の子どもにも注意を払いつつ、みんなで世話を」というルールがあったからだととらえておられます。

いつもなら、子どもどうしのトラブルが起きると、すぐに当事者の親御さんが

飛んでいって自分の子どもを怒るというような場面で、そうならないようにするルールがあることで、「子どもの問題」を大人が解決するのではなく、できるだけ「子ども自身に問題を返す」ことができたと思うのです。そのためには、大人が「大人の判断」をしてしまうのではなく、子ども自身に「聞く」ということが重要になってくるように思います。そうでないと「子どものきもち」がほったらかしになってしまうのではないかでしょうか。

「おとのきもち」と 「子どものきもち」

この通信を「おとのきもち　子どものきもち」としたのは、この両者が往々にしてズレていて、そのズレによるトラブルが日常茶飯事ではないかと思うからです。でも、日常ではついいつのズレを見逃しがち。というか、いちいちかまってられないという現実もあるでしょう。

「おとな」にはおとの都合があり、また「こども」には子どもの都合があります。でも、親子の関係では、対立しぶつかり行き詰まることが多い、子どもが小さければ小さいほど、「おとの都合」でコトが運びがち。どうしても仕方のない「おとの都合」もあれば、「おとな」ならではの解釈で、「子どものきもち」を無視してしまうことも…。

そんな日常を抱えながら、「おとな」は「おとな」どうし問題を共有して一緒に考えることで、「おとのきもち」も「子どものきもち」も大事にできるような場を、これからも持っていくたいし、そういう場の情報をお知らせできたらと思っています。(今年の合宿については次号以降)
*ラーンネット・グローバルスクールについては、雑誌「プレジデントファミリー」9月号参照。<http://www.L-net.com/>